

出エジプト記18章「神の家を治める人々」

1A 舅イテロとの再会 1-12

1B 家族を戻すイテロ 1-6

1C 神による出エジプト 1

2C 妻と息子への配慮 2-4

3C 神の山 5-6

2B 神を賛美するイテロ 7-12

1C 愛情のこもった挨拶 7

2C 主の救い 8-11

3C 神の前での食事 12

2A 責任分担の助言 13-27

1B 民の裁き 13-18

1C 神の御心を求める人々 13-16

2C 重すぎる荷 17-18

2B 神を恐れる人々 19-27

1C モーセの務め 19-20

2C 長たちの資格 21-23

3C 助言を聞いたモーセ 24-27

本文

私たちは出エジプト記 18 章に入ります。モーセたちは、エジプトを出てから荒野の旅をしていきましたが、ついに、来るべきところにほとんど到着しています。神の山とも呼ばれる、ホレブの山です。覚えていますでしょうか、モーセは 40 年間、ミディアンの祭司イテロの下で羊飼いをしていました。その娘の一人、ツィポラを妻として与えられました。彼がイテロの羊を飼っていた時に、荒野の奥のほうまで導いて、シナイの荒野にあるホレブに入ってきたのです。そこで主の使いが、燃える柴の中に現れて、モーセを呼び、イスラエルをエジプトから導き出ささいと命じられました。その時に、こう言われています。「3:12 あなたがこの民をエジプトから導き出すとき、あなたがたは、この山で神に仕えなければならない。」ですから、モーセはこの主の命令に聞き従い、今、ついに神の山のところまでやって来たのです。

モーセはミディアン人のところから出ていく時に、イテロにしばらくの間、お暇をさせてもらえるよう頼みました。エジプトにいる同胞がまだ生きながらえているのかを見させてほしいとお願いしました。イテロは、「安心して行きなさい。」と言います。そして妻ツィポラと息子といっしょに行きます。けれども、途中でモーセが主によって殺されそうになります。ツィポラはすかさず、息子の包皮を切り取り、それをモーセの両足につけました。そして「4:25 まことに、あなたは血の花婿です。」と言

います。息子はイテロの家に育てられ、イスラエル人ではなくミディアン人として生きていたのです。それで割礼を受けていませんでした。けれども、それではモーセの家族として生きていくことはできません。それでツイポラの咄嗟の行動が、モーセを救ったのです。

1A 舅イテロとの再会 1-12

おそらくこの時点で、ツイポラと息子はイテロのもとに帰りました。モーセに与えられた使命に、家族は共にいることは耐えきれなかったことでしょう。けれども、ミディアン人の地に近いところまでついに戻ってきたのです。それでイテロは、モーセの家族を彼に引き渡すために彼のところにやってきたのです。エジプトを出てきてから三か月、その前に、あの十の災いがありましたから、もっと時間が経っています。久しぶりの再会です。そしてモーセとしては、ついにいろいろな苦難をとおって、それで主が本当にここにまで導いてくださったことを実感していたことでしょう。主は、確かにモーセに語られたとおりに、してくださいました。戦いがありました。神は真実なお方です。

これまで、私たちも、信仰の試練や訓練の旅を見てきましたが、いつもその時ばかりではありません。その試練の中にあっても確かに主が守ってくださったことを知り、安心してその恵みを分かち合う時もあります。パウロとバルナバが、宣教旅行で困難や迫害があったけれども、確かにアンティオキアの教会に戻ることができ、その恵みを分かち合ったように、です。モーセがホレブの山のところまで戻ってきて、イテロに再会して、その恵みを分かち合います。

1B 家族を戻すイテロ 1-6

1C 神による出エジプト 1

1 さて、モーセのしゅうと、ミディアンの祭司イテロは、神がモーセと御民イスラエルのためになされたすべてのこと、どのようにして【主】がイスラエルをエジプトから導き出されたかを聞いた。

イテロは、「祭司」でした。ミディアン人の宗教ですから、彼は異教の儀式を執り行う祭司でした。ミディアン人は、アブラハムの子孫です。サラが死んだ後に、ケトラという妻を迎え、彼女は多くの子をアブラハムに生みましたが、その中の一人がミディアンでした(創世 25:2)。ですから、アブラハムの信仰の影響を受けていますが、契約から外れているので独自の宗教を持っていたようです。しかし、イテロはイスラエルの神に回帰しています。彼は神がモーセとイスラエルのためになされたこと、エジプトから導き出されたことを聞いています。イテロは、異教の祭司でありながら、しかしイスラエルの神の偉大さをモーセとイスラエルを通して知ります。あれだけの大きな出来事ですから、知られないでいることはありません。

2C 妻と息子への配慮 2-4

2 それでモーセのしゅうとイテロは、先に送り返されていたモーセの妻ツイポラと 3 彼女の二人の息子を連れて行った。その一人の名はゲルシヨムで、「私は異国にいる寄留者だ」という意味である。4 もう一人の名はエリエゼルで、「私の父の神は私の助けであり、ファラオの剣から私を救い

出された」という意味である。

出エジプト記 3 章には、ゲルシヨムだけが書き記されていましたが、ここで次男、エリエゼルの名も書かれています。この二人の息子の名にも、イテロがモーセによってイスラエルの神が証しされていたことが分かります。ゲルシヨムについては、寄留者を意味する言葉であって、彼はイスラエル人であって異邦人ではなく、寄留しているにしかすぎないことを証ししています。ヤコブがエジプトにいた時も、寄留しているだけであると証言し、その遺体はカナンの地に持っていくように命じたのと似ています。けれども、これは積極的な証しではなく、否定的です。自分はおるべきところにいる、異国にいるとしか言っていない。けれども、次の子は「私の神は助け」という意味のエリエゼルを付けているのです。ファラオに殺されずに、自分は今、ここにいると主が救ってくださったことを、自分の息子の名に付けました。

私たちも、ある意気消沈するような状況に入れられるかもしれません。けれども、モーセのように初めは否定的な感情しかなくとも、だんだん、それでも主がおられることを意識する、信仰によって元気づく体験をするのではないのでしょうか。

3C 神の山 5-6

5 こうしてモーセのしゅうとイテロは、モーセの息子と妻と一緒に、荒野にいるモーセのところにやって来た。彼はそこの神の山に宿営していた。6 イテロはモーセに伝えた。「あなたのしゅうとである私イテロが、あなたの妻とその二人の息子と一緒に、あなたのところに来ています。」

ミディアン人の地は、紅海を挟んで、アラビア半島の西岸地域と、シナイ半島の東岸地域で遊牧をしていました。彼らはシナイ半島の東のところにいましたが、そこからホレブの山のところにやってきたのです。モーセは、ホレブの山のところに宿営していました。

そして、中東いや、いろいろな文化での慣習にあるでしょうが、目上の人のところに目下の人が入ります。なので、イテロはモーセの宿営するところまで行かずに、その近くまで来て、それでモーセの方からイテロのところに参上することができるようにさせたのです。

2B 神を賛美するイテロ 7-12

1C 愛情のこもった挨拶 7

7 モーセはしゅうとを迎えに出て行き、身をかがめ、彼に口づけした。彼らは互いに安否を問い、天幕に入った。

当地における習慣です。まず、迎えにいったら身をかがめています。相手を敬っている姿です。それから口づけです。これは世界のいろいろなところで親愛の情を表すために、たくさん行われています。ユダヤ人やアラブ人は、今でもこれを行っています。新約聖書では、使徒たちが教会の人

たちに、「ロマ 16:16 あなたがたは聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。」と命じています。私たちは日本に生きていて、そのような習慣がありませんからしませんが、しかし、神の家族として、何らかの形で親愛の情を表現すべきですね。朝の礼拝の時の挨拶が、これに当たるでしょう。

そして彼らは互いに安否を問っています。天幕に入るまでは、長い時間が経ったことでしょう。アラブ人の文化では、実際の中身を話し合うために、その前座の四方山話を長いことをしないといけないそうです。

2C 主の救い 8-11

8 モーセはしゅうとに、【主】がイスラエルのために、ファラオとエジプトになさったすべてのこと、道中で自分たちに降りかかったすべての困難、そして【主】が彼らを救い出された次第を語った。9 イテロは、【主】がイスラエルのためにしてくださったすべての良いこと、とりわけ、エジプト人の手から救い出してくださったことを喜んだ。

モーセは順序立てて話したようです。ファラオとエジプトになさったこと、つまり十の災いと、紅海が分かれたことを話しました。そして、紅海を渡った後の荒野の旅においても、飲む水がない、食べるパンがない、それからアマレク人との戦いがありました。そういった困難を語りましたが、今、こうやって私たちはいます、つまり主が救い出されたのですと話しました。

その中で、イテロがとりわけ喜んだのは、主が、エジプト人の手から主が救い出してくださったこととありました。イテロは、モーセから数多くのことを聞いていたのでしょう。エジプト人がイスラエル人を苦しめていたこと、モーセは救い出そうとしたが徒労に終わったこと、ファラオが自分を殺そうとしたことなど。そしてイスラエル人には神がおり、その名はヤハウェであることも知り、この方がいかに偉大であるかも知りました。

10 イテロは言った。「【主】がほめたたえられますように。主はあなたがたをエジプト人の手とファラオの手から救い出し、この民をエジプトの支配から救い出されました。11 今、私は、【主】があらゆる神々にまさって偉大であることを知りました。彼らがこの民に対して不遜にふるまったことの結末によって。」

聖書には、異邦人であるけれども、イスラエル人に起こった偉大なことについて、その神をほめたたえる記事が数多く出て来ます。ソロモン王を謁見したシェバの女王もそうですし、ダニエルが仕えていたバビロンの王やメディアの王もそうでした。イテロは、モーセとイスラエル人たちによって、この方が救い主であられて、またあらゆる神々にまさって偉大であることをほめたたえています。そしてエジプトがいかに不遜にふるまっていたことも共感しました。

多くの人たちが、このような形でイエス様の名をほめたたえますね。自分たちに神々と呼ばれるものがあるけれども、宗教があるけれども、それらが自分を救うことがなかった。しかし、イエスの名には救いがあると、クリスチャンたちを通して知ります。そして、神の名をほめたたえ、自分自身もクリスチャンになることも決心します。はたして、イテロがイスラエルの神を信じる者になったかどうかは、定かではありません。イスラエルの神を敬っているのか、あるいはそれ以上に、この方を主として信じているのかは定かではありません。けれども、カナン人のラハブもそうでしたが、初めや恐れ敬いがあり、それからイスラエル人の間に住みましたが、そのようにして、人々は回心していきます。

3C 神の前での食事 12

12 モーセのしゅうとイテロは、神への全焼のささげ物といけにえを携えて来たので、アロンとイスラエルのすべての長老たちは、モーセのしゅうととともに神の前で食事をしようとやって来た。

イテロは、イスラエルの神、主を敬うために、全焼の捧げ物といけにえを携えてきていました。ミディアン人の宗教にも、同じような儀式があったのでしょう。けれども、ここではイスラエルの神を敬っています。それをもって、アロンやイスラエルの長老たちもみな、共にそれを捧げました。そして神の前で食事をしています。火で焼いて、その一部をみなで食べます。これが、交わりの原型です。主との交わり、そして主にあって互いの交わりです。同じ肉を食べることによって、それを摂取することによって、互いが一つになることを表しています。

イスラエル人と異邦人がこのように共に食事をしているのは、来るべき教会を示しています。「エペ 2:14 実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たちの二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し…」私たちの間にある隔ての壁が、キリストの肉、流された血によって壊されていることを、十分に味わいたいですね。

2A 責任分担の助言 13-27

そして非常に興味深い出来事が起こります。まだ本当に信仰を持っているかどうか、定かではないかもしれないイテロによって、モーセの奉仕にとって非常に大切な助言を受けます。それは、「主にある働きを、その重荷を、他の者たちにも分担する」ということです。

1B 民の裁き 13-18

1C 神の御心を求める人々 13-16

13 翌日、モーセは民をさばくために座に着いた。民は朝から夕方までモーセの周りに立っていた。

モーセは、真面目な人でした。イテロとの時間は十分に楽しみました。アロンや長老たちも、共に食事をしました。けれども、翌朝にはしっかりと、やるべき務めを果たしています。「民をさばくために座に着いた」とあります。この裁きは、罪に定めるための裁きではありません。判断を下すという

ことです。イスラエルの民は壮年男子だけで約 60 万人いました。女子供合わせたら 200 万人はいたことでしょう。とてつもない人数が、共に荒野の旅をしているのです。いろいろなことが起こります。その中で、何が正しいことなのか、良いことなのか、何が神の御心なのかを知りたいと願います。今であれば、教会で牧者に信徒が祈ってほしいとやって来ること、また相談を求めに来るようなものです。けれども、それ以上でしょう。共同生活をしていますから、その必要は週に一・二回会っている仲の比ではありません。

興味深いのは、新改訳 2017 の訳です、「モーセの周りに立っていた」とあります。列を作って並んでいたのではなく、周りに群がっていた感じですね。我先に、モーセのところを裁いてもらおうとしています。ちょっと混乱した状態、無秩序感がありますね。

14 モーセのしゅうとは、モーセが民のためにしているすべてのことを見て、こう言った。「あなたが民にしているこのことは、いったい何ですか。なぜ、あなた一人だけがさばきの座に着き、民はみな朝から夕方まであなたの周りに立っているのですか。」15 モーセはしゅうとに答えた。「民は神のみこころを求めて、私のところに来るのです。16 彼らは、何か事があると、私のところに来ます。私は双方の間をさばいて、神の掟とおしえを知らせるのです。」

外部から来たイテロだからこそ、この異常さに気づきました。朝から夕方まで、モーセのところ民が周りを取り囲んでいるのです。モーセは答えています、実に真面目です。主のみこころを求めに来ているのだから、きちんと神の掟と教えを知らせないといけないとしています。これは正しいことです、けれども、良くないことだとイテロは指摘します。真面目だからこそ、陥ってしまう罠があります。

2C 重すぎる荷 17-18

17 すると、モーセのしゅうとは言った。「あなたがしていることは良くありません。18 あなたも、あなたとともにいるこの民も、きっと疲れ果ててしまいます。このことは、あなたにとって荷が重すぎるからです。あなたはそれを一人ではできません。

荷が重すぎます。モーセは真面目にやっていますが、彼だけでなく、民も疲れ果ててしまいます。ずっと朝からモーセの前にいるのに、全然、自分の番がやってこない、ということを想像してみてください。大学病院の待合室で、何かありそうな風景ですね。

2B 神を恐れる人々 19-27

1C モーセの務め 19-20

19 さあ、私の言うことを聞きなさい。あなたに助言しましょう。どうか神があなたとともにいてくださるように。あなたは神の前で民の代わりとなり、様々な事件をあなたが神のところを持って行くようにしなさい。20 あなたは掟とおしえをもって彼らに警告し、彼らの歩むべき道と、なすべきわざを

知らせなさい。

イテロは、命令ではなく、助言、アドバイスとしてモーセに伝えます。彼自身、あくまでも自分の意見なので、神が共にいてくださるようにと祈っています。自分の意見が絶対ではないことを知っていますから、主の願いにかないますようにという祈りを込めながら話しています。

まず、モーセの務めを話しています。モーセの務めは、主の前に出ることです。「あなたは神の前で民の代わりとなり」と言っていますね、裁き司はそのような存在です。何かを裁定する時に、その判断を受けた者にとっては、モーセは神の代わりです。モーセは、自分の意見を述べるのもなく、自分の権力をふるまうのでもなく、あくまでも主の前に出て、主から与えられた掟と教えを民に伝えます。その中身は、一つに「歩み」です。どのように生きるか？ということですね。そしてもう一つは、「なすべきわざ」です。これは、行いですね。生活のあり方と、実践すべきことを教えます。

2C 長たちの資格 21-23

21 あなたはまた、民全体の中から、神を恐れる、力のある人たち、不正の利を憎む誠実な人たちを見つけ、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として民の上に立てなさい。

モーセが神の前に行き、そして神の掟と教えを伝えるのが務めですが、それを分担して行う者たしを民の中から見つけ、民の上に長として立てなさいということです。これは、神の統治において極めて重要な働きとなります。パウロは、ロマ 12 章でこれを「治める賜物」と呼んでいます。神の家を治める能力です。

ここに、「力のある人たち」とあります。これが能力のある人たちのことです。確かに能力は必要ですが、けれども、その前に「神を恐れる」人でなければいけません。人を治めることは、とてつもない責任です。自分のしていることに対して、申し開きをしなければいけないことをよく知っている人です。自分のしていること、言っていることが、そのまま神の前で公正なことなのかを裁かれます。自分の意見や考えではなく、あくまでも神の御心、神の思いを伝えなければいけません。人を治める人は、治められることを知っている人でなければいけません。自分の権威の下にいる人々がいますが、自分の上に権威者がいることを知っている人です。パウロが主人と奴隷の関係を教えている時に、主人に対してこう言いました。「コロ 4:1 主人たちよ。あなたがたは、自分たちも天に主人を持つ者だと知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。」

そして、「不正の利を憎む」人でなければいけません。これは、裁きにおいて、必ず付き物なのが賄賂です。賄賂を憎んでいることです。公正な裁きにおいて、人々はその判断を下す人に、何とかして影響を与えようとし、印象づけようとし、それを、一切、受け入れてはいけないということです。神がえこひいきをしない方だからです。「申 10:17 あなたがたの神、【主】は神の神、主の主、偉大で力があり、恐ろしい神。えこひいきをせず、賄賂を取らず、」

さらに、「誠実な人」です。これは、真実な人、あるいは真理の人と言ってもいいです。偽らない人のことです。主の前にある自分は、弱いものです。その弱さがあることを知っていながら、なおのこと、神を畏れ、神に拠り頼み、聖霊に満たされることを求めています。そして、すべてのことを主に証して、偽りのない人です。偽りは、聖なる神にとって厳しい裁きがあります。アナニアとサツピラのことを思い出してください。彼らは、自分たちの地所を売った代金のすべてを持ってきたと偽りましたが、聖霊を欺いたとのことで、その場で息絶えて死んでしまいました。

22 いつもは彼らが民をさばくのです。大きな事件のときは、すべてあなたのところに持って来させ、小さな事件はみな、彼らにさばかせて、あなたの重荷を軽くしなさい。こうして彼らはあなたとともに重荷を負うのです。

神の家において、この原則が必要です。パウロは、「ガラ6:2 互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。」と言いました。キリストの律法とは、互いに愛し合うことです(ロマ 13:8-10)。牧者など、指導者だけが重荷を負うではありません。その務めを他の人々も担っていきます。ある人々は、「小牧者」という言葉を使っていますが、これは適切ですね。一人一人が、ある意味で、弱い兄弟や姉妹の牧者となるのです。その弱さを担っていく重荷が与えられています。そして、大きな事件とありますが、この人のこの課題については、指導している人が直接、関わらないといけないと思われるものを行うのです。

23 もし、あなたがこのことを行い、神があなたにそのように命じるなら、あなたも立ち続けることができ、この民もみな、平安のうちに自分のところに帰ることができるでしょう。」

イテロは、慎み深く、神があなたにそう命じているのならば、と、自分の助言が神のみこころにかなっているのであれば、と前置きしています。そうすれば、立ち続けることができます。忠実に仕えるのには、継続性が必要です。途中で倒れてしまってははいけません。長距離走です。そして、「平安のうちに自分のところに帰ることができる」と言っています。神の秩序があるとき、よく治められている時の特徴は、「平安」です。パウロは、王たちや上に立つ人たちのために執り成しなさい、と言っていますが、「Iテモ 2:2 それは、私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。」とあります。良い統治には平安があるのです。そして神は平和と秩序の神です。「Iコリ 14:33 神は混乱の神ではなく、平和の神なのです。」

3C 助言を聞いたモーセ 24-27

24 モーセはしゅうとの言うことを聞き入れ、すべて彼が言ったとおりにした。25 モーセはイスラエル全体の中から力のある人たちを選び、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長として、民の上にかしらとして任じた。26 いつもは彼らが民をさばき、難しい事件はモーセのところに持って来たが、小さな事件はみな彼ら自身でさばいた。

モーセの特徴は、謙遜です。民数記 12 章に、「12:3 モーセという人は、地の上のだれにもまさって柔和であった。」とあります。イテロの助言に対して、それを聞き入れる力がありました。指導者は、主から与えられたことに対して、しっかりと保っていなければいけません、プライドから自由にされていないといけません。

彼は、この助言を、次にこの山を離れて、新たに旅立つ時に民に対して語っています。申命記 1 章 9 節以降に、モーセがここでイテロが助言したことを民に語って、民もそれは良いことです、と答えている場面があります。モーセが重荷を担いきれないという課題はそれ以後も続き、人々が肉がいたいと貪った時に、自分には負いきれないと主に申し上げた時、モーセに与えられていた御霊が、七十人の長老にも一部が取られて、彼らが一度だけですが預言をしました(民 11:23-25)。そして使徒行伝 2 章には、全ての人に霊が注がれるというヨエルの預言が今、成就したことをペテロが語っている場面があります。御霊の賜物が全ての信者に降り注がれるのです。

神の家における統治は、初代教会にも受け継がれました。ギリシア語を話すユダヤ人が、ヘブル語を話すユダヤ人に対して苦情が出ました、やもめが配給においてなおざりにされているから、ということです。それで、使徒十二人は弟子たちを集めて、「私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。」と言いました。まさにイテロの助言どおりです。そして、「そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」と言っています。そして、イスラエルの民がモーセの言ったことに同意したように、教会の人たちも、「この提案を一同はみな喜んで受け入れた。」とあります。

27 それからモーセはしゅうとを送り出した。しゅうとは自分の国へ帰って行った。

舅イテロを、モーセが送り出しました。彼はミディアン人のところに戻りました。けれども、民数記 10 章によれば、彼の息子ホバブが残っていて、彼が荒野の道案内をすることになります。そして約束の地に入ってから、ユダの相続地の、ユダの荒野のところで共に住むことになります(士師 1:16)。サウルの時代にも彼らは存在し、サウルはアマレク人を討伐する前に、いっしょに打ってはいけないので、避難するように前もって呼びかけています(I サム 15:6)。イスラエルの民と、このようにして共に住んでいた、イスラエルの神を敬う民として残っていたようです。

今回は、シナイの荒野にある、この神の山にモーセが上り、そして神ご自身が天からシナイの山に降りてこられるところを学びます。